



ひご薬局 下林店
薬局長



そうごう薬局 熊本中央店
認知症研修認定薬剤師

薬局を身近な相談窓口に

総合メディカルグループ株式会社が運営する県内の薬局 10 店舗が、令和 7 年 12 月に熊本市からチームオレンジに認定。企業が主体となり、行政区を越えて構成されたチームとしては、熊本市で初めての事例です。薬局の強みと専門性を生かし、認知症の人やその家族をどのように支えているのかを聞きました。

「いつもと違う」に気づき適切な支援へ

今回チームオレンジに認定された総合メディカルグループ株式会社の薬局 10 店舗は県内各地にあり、人吉市では同グループが運営する「ひご薬局」がその一つです。

薬局には同じ患者さんが定期的に来局するため、日常生活の小さな変化に気づきやすいという特徴があります。「薬が余るようになった」「同じ質問を繰り返す」といった変化です。身だしなみが以前と違ったり、小銭での支払いが難しくなったりすることもあります。

こうした変化があっても、すぐに認知症を疑うことはありません。本人の気持ちを大切にし、不安や抵抗感を与えないよう言葉を選んで声を掛けます。ひご薬局では、服薬がうまくできていない人には「自宅での薬の管理もお手伝いできますよ」と案内するなど、相談のハードルを下げる工夫をしています。

薬局は、薬を渡すだけの場所ではありません。日頃の変化を捉え、必要に応じて医療機関や地域包括支援センター、



飲む薬を一つの袋にまとめ、袋には日付を書くなどして飲み忘れを防止

介護サービス事業所などになく、身近な事業者としての役割も担っています。

暮らしに合わせた服薬の工夫

薬局では、認知機能が低下しても安全に服用できるように、1 回分の薬をまとめる「一包化」や、お薬カレンダーの活用、薬袋への日付の記載などを行っています。家族やヘルパーなどが関われる時間帯に合わせ、服用回数をまとめられないか、薬剤師から医師へ提案することもあります。

大切にしているのは「薬に生活を合わせるのではなく、生活に薬を合わせる」という視点です。

高齢になると複数の薬を服用する人が増え、その副作用で物忘れやせん妄、ふらつき

高齢者見守りネットワークに登録をお願いします

認知症などの高齢者を地域全体で見守る仕組みの一つに高齢者見守りネットワークがあります。このネットワークに登録した人やその家族には見守りシールを配布。衣類や持ち物に貼ることで、いざというときにその人の身元や連絡先を知ることができます。認知症について困りごとなどがある人は、地域包括支援センターの認知症地域支援推進員にご相談ください。

問合せ 市地域包括支援センター（☎24-9193）、
市高齢者支援課元気・長生き係（22-2111 内線1211）



認知症地域支援推進員

認知症を地域で支える

認知症の人やその家族を地域で支える「チームオレンジ」。市内で活動する人たちの思いを紹介します。

認知症に寄り添う地域のチーム

「チームオレンジ」とは、認知症サポーターがチームを組み、認知症の人やその家族に対し、早期から生活面などの支援を行う取り組みです。厚生労働省が推進する認知症施策の一つで、全国の市町村で整備が進められています。

活動内容は地域によってさまざま。例えば、ごみ出しや買い物の手伝い、外出時の付き添い、認知症カフェなどの運営、日常的な声掛け・見守りなどが行われています。

また、支援をする側・される側という関係性ではなく、認知症の当事者自身もメンバーとして参加し、一緒に活動できるのが大きな特徴です。住民同士の助け合いに加え、薬局などの地元企業や専門職も連携しながら、認知症になっても安心して暮らし続けられる「やさしいまちづくり」の輪を広げています。

「1人じゃない」と思える居場所を

住民が主体となり、チームオレンジとして活動する「D カフェ青い鳥」。認知症カフェ「D カフェ青い鳥」と認知症予防ゲームなどを楽しむ「すずめの学校」を運営し、認知症の人やその家族が気軽に集える居場所をつくっています。活動に込めた思いや大切にしていることを聞きました。



D カフェ青い鳥

私たちのしかできないことを

活動の原点は、京都の NPO 法人「認知症予防ネット」の研修会で聞いた「優しさを絶え間なくシャワーのように降り注ぐ」という考え方に感銘を受けたことです。私たちが特に大切にしているのは、認知症や介護が必要となった高齢者を支える家族へのおもてなし。本人に付き添って来られた家族が、数時間でも自分の時間を持ったり、同じ悩みを抱える人と愚痴をこぼし合ったりできる場所にしたいと思っています。「住み慣れ

た人吉市で、私たちにできること、私たちにしかできないことをやる」。その思いで活動を始めました。

誰もが気軽に集える場所

活動は平成 30 年 5 月に九日町で始め、コロナ禍や令和 2 年 7 月豪雨による休止を経て、令和 4 年 3 月から現在の「二条橋いこいの家（上青井町）」で再開しました。認知症の人だけでなく、誰もが一緒に食事や会話、ゲームを楽しみ、気負わずに過ごせる場所を目指しています。

また、市の地域包括支援センターから専門職を招き、30 分ほど話を聞く機会も設けています。熱中症や栄養など、身近な暮らしの健康情報を学ぶ大切な時間です。

小さな変化に気付ける場所

定期的に顔を合わせることで、食欲の低下や認知症の症状の進行など、小さな変化に気付くことがあります。それを家族と共有できるのも、継続して集まるからこそ。普段は家族の前であまり話さない人が、この場所では自己紹介や歌を楽しむ姿に、家族が驚

き、喜んでもらえたことも印象に残っています。

自分たちの手で長く続ける

現在は 5 人のスタッフが、完全なボランティアで運営しています。参加者に振る舞う料理はそれぞれが作って持ち寄り、材料費も負担。自分たちの思いを大切にするためにも、制約や期限がある行政の補助金などには頼らない、自主的な運営を重視しています。参加者からの「料理がおいしかった」「楽しかった」といった言葉が、何よりの励みです。これからも、本人だけでなく支える家族にも優しさを届け、「あそこに行けば誰かに会える」「自分は 1 人ではない」と共感できるような居場所にしていきます。



参加者全員で昔ながらの歌を歌う時間は恒例のひとつ